

# 「～にくい」と「～づらい」の使い分けについて

— コーパスを利用した調査 —

進 藤 真 理

## 1. はじめに

難易文「～やすい／にくい」の「～にくい」の類義語として「～づらい」がある。「～にくい」と「～づらい」は、ともに動詞の連用形について、その動作を行うのが困難である意を表す形容詞型活用の接尾語であるが、近年、日常の話し言葉や雑誌、新聞などにおいて、「～づらい」の使用が目立って多くなり、「～にくい」の使用範囲を侵食しているような感がある。このことは、高島（2007）でも指摘されており、筆者の観察でも確かに一つの現象として感じられるものである。高島（2007）では、「分かる」「歌う」「打つ」などの困難表現が、従来の「～にくい」から「～づらい」へと移行していることを述べているが、筆者自身もテレビ放送や銀行の掲示物などで、「血が止まりづらい」「野菜が育ちづらい」「乾きづらい洗濯物」「（耳が）聞こえづらい方」など、従来「～づらい」とは結合しないとされてきた無意志動詞と結合して使用されている例も観察している。

高島（2007）は、「～づらい」の用例が話し言葉として広がり、徐々に文章にも飛び火し、新聞の社説にも出現するに至ったのではないかと述べているが、この現象はいつごろから起こり、どのように変化してきたのだろうか。コーパスを利用した先行研究<sup>①</sup>では、ある一定期間のデータやデータ調査時点における「～にくい」「～づらい」の出現頻度、また「～づらい」と結合する動詞の頻度、活用形、「～づらい」用法の拡大について述べられている

が、この現象の変化の様相については述べられていない。

本稿では、西日本新聞オンライン記事データベース「パピルス」<sup>②</sup>を利用し、1991年、2001年、2011年の10年ごと3回、各1年分の新聞記事データをもとに、「～づらい」の用例の書き言葉における広がり推移を調査、分析した。「パピルス」では、1989年からの西日本新聞の記事がデータベース化されており、話し言葉では追跡が難しい変化の様相が調査しやすく、金城（2011）が言うように新聞記事は「編集者の校閲を経た」データ<sup>③</sup>ではあるが、校閲を経てもなお表れている「～づらい」用法があるというところに意味があると考えた。

## 2. 先行研究

森田（1977）および飛田・浅田（1991）では、「～にくい」「～づらい」の持つ意味について解説している。森田（1977）は、「～にくい」について、無意志動詞、意志動詞、自然現象の動詞が上接して客観的な困難を表し、対象側に困難の原因があるマイナス評価の状況であるとしている。

また、「～づらい」については、自然現象や無意志性の動詞には続かず、主として肉体的、精神的理由から行為の遂行にブレーキがかかる場合に用いられ、「本人の意識としては行おうとしながら思うにまかせないというもどかしさがあり、と同時に、意志にかかわりのない不可抗力の状況に基づく困難表現でもあり、マイナス評価となる」としている。（傍点は原文）

飛田・浅田（1991）では、「～にくい」は、物理的・心理的な困難さを表し、ややマイナスよりのイメージの語とする。また、困難の原因が主体でなく対象にあることが多いとしている。一方、「～づらい」も、物理的・心理的な困難さを表すが、「～にくい」がやや客観的な困難さを暗示し、困難の原因が対象にあることが多いのに対し、「～づらい」は困難を感じている主体の存在を暗示するとしている。

三木（2004）は、従来の研究では「～づらい」と結合しないとされてきた非対格自動詞について、結合できるものとできないものがあるとして、内在的コントロール（動作主が存在しないが、主語名詞句がある意味、自ら作用・活動することができる潜在能力）を持っている自動詞は「～づらい」と共起できると主張している。そして、その理由を自発、否定、可能の連続性と「～づらい」の語源の意味から説明している。

「～づらい」の本来の意味は、主体から発せられる能動的な心理的苦痛を表し、その意味が、非対格自動詞と共起するとき、主語名詞句の自発的に生じる能力、内在的コントロールという形で残っており、一方、「～にくい」は、外から引き起こされた受動的な感情を表し、そのため、主語名詞句に内在的コントロールを要求しないと指摘している。

大量のデータを利用して「～にくい」「～づらい」の用例を調査・分析した先行研究としては、神作（2006）と金城（2011）がある。

神作（2006）は、大手スポーツ紙の運営するウェブサイトから用例を収集し、①語形、②上接動詞の性質（意志動詞・無意志動詞、活用形式）、下接動詞の活用形別の調査、分析を行い、「～にくい」「～づらい」の特徴について次のようにまとめている。

- ①「～にくい」系は、上接語についてどの場合にも現れ、バリエーションも豊富。
- ②「～づらい」系は、「終止連体形」「意志動詞」の例が90%以上。
- ③サ変動詞は、漢語サ変や英単語サ変も含め「～づらい」の形が圧倒的に多い。これはサ変動詞自体が意志性を強く持ち・主体の動作であるという側面のためと考える。
- ④「～にくい」は、意志動詞にも無意志動詞にも現れるのに対し、「～づらい」は意志動詞に表れやすく、比率が高い。
- ⑤下接語に関しては、「～にくい」の方は、「言い切り」「ていねいさ」の性質が強く、「～づらい」の方は、「話し言葉」「バリエーションの多さ」の性質がある。

金城 (2011) は、2004年5月から1年分の「Yahoo! 知恵袋」掲載のベストアンサーのコーパスを利用して「～にくい」と「～づらい」に前接する動詞の出現頻度数を調査し、「～づらい」用法拡大の様相を分析している。その結果、次のようなことが明らかになったとしている。

- ① 「～にくい」と「～づらい」の出現数では、前者が後者を大幅に上回っている。
- ② 『～づらい』は無意志動詞とは結びつかず話し手自身に困難さの原因があることを示唆するという従来指摘されていた用法、特に自動詞用法と総称解釈に変化が見られる。
- ③ 存在動詞「居る」の用例では、「居づらい」が「居にくい」を上回ったことは、「～づらい」の用法の拡大を示すものである。

### 3. 「～にくい」「～づらい」の用法分類と問題提起

#### 3.1 「～にくい」「～づらい」の用法分類

「～にくい」「～づらい」用法を、森田 (1977) の説明にしたがって、例文を添えて整理すると次のようになる。(作例と下線は筆者)

- (ア) 「～にくい」は、自然現象、無意志性の動詞にも続くが、「～づらい」は、それらの動詞には続かない。

(自然現象)

- (1) 気温が高い地域にあるため、この湖は冬でも凍りにくい。
- (2) \*気温が高い地域にあるため、この湖は冬でも凍りづらい。

(\*:不適格な表現)

(無意志性動詞)

- (3) このカーテンは燃えにくい生地を使ってあるから安全だ。
- (4) \*このカーテンは燃えづらい生地を使ってあるから安全だ。

(イ) 主体の持つ条件（肉体的、精神的理由）に起因する場合は、「～にくい」、「～づらい」、ともに使用可能だが、「～づらい」には、本人の意志としては行いたい思いがありながら、思うにまかせないもどかしさが内包されている。

(肉体的条件)

(5) 風邪でのどが痛いので、大きな声が出しにくい。

(6) 風邪でのどが痛いので、大きな声が出しづらい。

(精神的条件)

(7) 繁忙期に休みを取りたいとは言いにくい。

(8) 繁忙期に休みを取りたいとは言いづらい。

(ウ) 対象や周囲の持つ条件に起因する場合は、自分の意志にかかわらず、不可抗力の状況に基づく困難表現として、「～にくい」、「～づらい」の両方が使用可能である。

(対象の持つ条件)

(9) この説明書は、字が小さくて読みにくい。

(10) この説明書は、字が小さくて読みづらい。

(周囲の持つ条件)

(11) 風が強くて、傘をさして歩きにくい。

(12) 風が強くて、傘をさして歩きづらい。

これを、飛田・浅田（1991）の解説と合わせてまとめると、「～にくい」は、どの条件でも適格で、客観的な困難を表し、対象側に困難の原因があることが多い。一方、「～づらい」は、自然現象、無意志性の動詞には結合せず、主として主体の肉体的、精神的理由による困難さを表しており、困難を感じている主体の存在が暗示されるということになる。

### 3.2 問題提起

神作 (2004)、金城 (2011) の研究により、数の上で、「～にくい」が「～づらい」を大きく上回っていること、また、神作 (2004) により「～づらい」は意志動詞に付く割合が高いということが分かっている。これらは先行研究で指摘されている、「～づらい」には用法の制約があるが「～にくい」にはそれがなく、意志動詞、無意志動詞、自然現象の動詞と結びつくことができること、「～づらい」は主体の困難を表し、意志性が高いことと合致すると言える。また、金城 (2011) によって、先行研究に反すると考えられる「～づらい」の用例 (主体に困難を帰することができないもの・無意志性の動詞と結合するもの・総称解釈ができるもの) も指摘されている。

しかし、両研究では、「～づらい」が以前に比べどの程度拡大してきているのか、また「～づらい」のどのような用法がどの程度拡大してきたのかという変化の様相が見えてこない。そこで、本稿では、現在の拡大の様相だけでなく、20年の間に「～づらい」がどのような変化を見せたのか、その拡大の推移と変化の内容、程度に重点を置き、調査、分析する。もちろん、20年間の変化とはいえ、一地方のブロック紙の10年ごと3回の調査ではおのずから限界があることも事実である。

ただ、一時点のみの調査では見えなかった何らかの別の「～づらい」の姿が捉えられるのではないかと考える次第である。

## 4. 調査の方法、結果、分析

### 4.1 調査方法

西日本新聞オンライン記事データベース「パピルス」を利用し、1991年、2001年、2011年の各1年間の「にくい」「づらい」「にくさ」「づらさ」の出現数を調査した。(2012年1月調査)

ただし、「川底にくいを打ち込んでいった」「みにくいアヒルの子」など、「動詞+にくい」「動詞+づらい」文形の困難表現に該当しないものは除外

した。また、西日本新聞がブロック紙であることから、「パピルス」には九州全域の地域版の記事も含まれるため、記事が重複している場合は重複分を除外した。

## 4.2 調査結果と分析

### 4.2.1 出現数の推移

「動詞+にくい」「動詞+づらい」の1991年、2001年、2011年、各1年間の出現数は表1に示すような結果になった。述ベ・異なり語数ともに、どの期間も「～にくい」の用例が「～づらい」の用例を大きく上回っている。高島(2007)では、(新聞の)「社説のタイトルにあらわれるころには、一般記事の文中においては、『…にくい』はあらかじめその席を『…づらい』にゆずっているにちがいない」「しかし、『…にくい』はなぜ追放された(あるいは追放されつつある)のだろうか?」とあり、三木(2004)も、「近年、「～づらい」は、類義語の「～にくい」の範囲を凌駕しつつあるといわれている」と指摘しているが、神作(2004)、金城(2011)の調査では、どちらも出現総数において「～にくい」が「～づらい」を上回るということがわかっている。本調査でも神作(2004)や金城(2011)と同様の結果を得ており、「～づらい」用法が増加・拡大しつつあるのは確かだが、数の上ではいまだ凌駕するほどではないことが明らかになった。

表1 「～にくい」「～づらい」の各1年間の出現数

		1991年	2001年	2011年
「～にくい」	延 べ	699	855	985
	異なり	141	180	199
「～づらい」	延 べ	48	91	189
	異なり	20	32	56

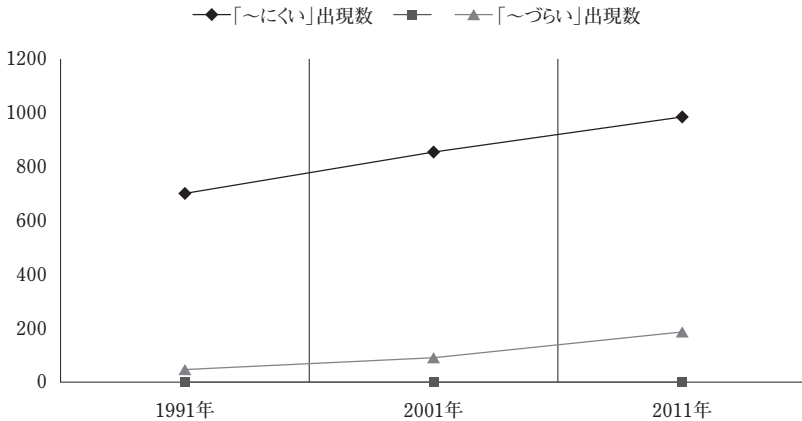


図1 「～にくい」「～づらい」の出現数の推移

表2 「～にくさ」「～づらさ」の各1年間の出現数

		1991年	2001年	2011年
「～にくさ」	延べ	9	27	20
	異なり	5	11	11
「～づらさ」	延べ	2	2	23
	異なり	2	2	6

しかし、表1に示すように過去20年間の「～にくい」、「～づらい」の述べ語数<sup>(4)</sup>を見ると、両語とも増加を続けている中で、「～にくい」に比べ「～づらい」の方が急激に増加していることがわかる。図1は、これをグラフ化したものである。

また、「動詞+にくさ」「動詞+づらさ」の結果は表2のとおりである。神作(2004)の調査では一例も現れなかった「～づらさ」が姿を見せ、2011年には、「～にくさ」と「～づらさ」が数において逆転している。その要因として、1991年0例、2001年1例だった「生きづらさ」が2011年には17例と急増を示していることがある。「～にくさ」で多く例が見られるのは、「分かり



にくさ」である。1991年4例、2001年11例、2011年6例だが、反対に「分かりづらさ」の方は1991年と2001年に各1例が見られるだけで、2011年には例がひとつも見られない。

#### 4.2.2 「～にくい」「～づらい」の上接動詞

「～にくい」「～づらい」は実際にどのような動詞と結合して使用されているのか、各年の頻度の高い順に上位35位までを比較してみた。表3-①、②、③を参照されたい。

特記すべきことは、「～づらい」に上接する「分かる」「見える」が増加していることである。表4に示したように、「～にくい」に上接する「分かる」「見える」も増加しているが、それが緩やかな変化なのに対し、「～づらい」に上接する方は「分かる」が20年前に比べ約3倍、「見える」が約10倍に増加している。用例が少ない（例えば1991年は1例だったものが2011年に10例に増えている）ので、倍率としての確実性は高くないかもしれないが大幅な増加であることは間違いない。「分かる」の「～にくい」用法に対する「～づらい」用法の比率は、1991年に9.4%であったものが2001年には18.4%になり、2011年には22.9%まで増加、「見える」では、1991年に0.5%であったものが2001年には10.7%、2011年には17.8%にまで増加している。「分かる」「見える」は無意志性の動詞<sup>9)</sup>であり、従来の研究では「～づらい」とは結合しないとされる動詞である。それが校閲を経ている新聞記事でも顕著な増加を見せているということは、無意志性の動詞においても、高島（2007）の言うように「あらかた」ではないにしろ、「～にくい」は一部の席を「～づらい」にゆずりつつあると言えるのだろう。

なお、「分かる」「見える」も含めた「無意志動詞+づらい」は、表5の通り、述べ語数では1991年9例、2001年20例、2011年41例、異なり語数では、1991年3例、2001年7例、2011年9例と、全体的に増加の傾向にあるが、出現述べ語数の全体比では、1991年18.7%、2001年21.9%、2011年21.6%と、大幅な変化は見られない。しかし、「～づらい」と結合しないとされてきた

表3-① 1991年(1月~12月)「~にくい」「~づらい」上接動詞(頻度順)

(~にくい)

順位	「~にくい」上接動詞	頻度
1	する	109
2	分かる	74
3	考える	47
4	言う	21
5	出る	21
6	取る	19
7	つかむ	19
8	やる	18
9	見える	18
10	届く	15
11	入る	15
12	される	13
13	できる	13
14	なる	13
15	つく	11
16	育つ	11
17	使う	10
18	住む	10
19	出す	9
20	得る	8
21	読む	7
22	歩く	6
23	受ける	6
24	立てる	6
25	つくる	6
26	つける	5
27	通る	5
28	話す	5
29	見る	5
30	集まる	4
31	動く	4
32	聞こえる	4
33	立つ	4
34	なじむ	4
35	働く	4

(~づらい)

順位	「~づらい」上接動詞	頻度
1	する	13
2	分かる	7
3	言う	4
4	やる	3
5	取る	2
6	打つ	2
7	使う	2
8	聞く	2
9	いる	2
10	歩く	2
11	見る	1
12	見える	1
13	通る	1
14	売り込む	1
15	読む	1
16	かく	1
17	入る	1
18	入っていく	1
19	なる	1
20	探す	1

表3-② 2001年(1月～12月)「～にくい」「～づらい」上接動詞(頻度順)

(～にくい)

順位	「～にくい」上接動詞	頻度
1	する	108
2	分かる	65
3	見える	28
4	考える	23
5	つく	15
6	やる	14
7	なる	13
8	言う	12
9	届く	11
10	読む	10
11	入る	10
12	出る	8
13	歩く	7
14	される	7
15	見つける	7
16	得る	6
17	動く	6
18	割れる	6
19	言い出す	5
20	使う	5
21	できる	5
22	受ける	4
23	打ち出す	4
24	聞き取る	4
25	滑る	4
26	出す	4
27	取る	4
28	治る	4
29	扱う	3
30	落ちる	3
31	聞こえる	3
32	進める	3
33	戦う	3
34	立てる	3
35	通る	3

(～づらい)

順位	「～づらい」上接動詞	頻度
1	する	23
2	分かる	12
3	読む	6
4	釣る	6
5	やる	4
6	歩く	4
7	見る	3
8	行く	3
9	見える	3
10	聞く	2
11	戦う	2
12	絞る	2
13	言う	2
14	おる	1
15	運ぶ	1
16	興る	1
17	通る	1
18	動く	1
19	別れる	1
20	近寄る	1
21	入る	1
22	泊まる	1
23	住む	1
24	まとまる	1
25	育つ	1
26	扱う	1
27	打つ	1
28	示す	1
29	狙う	1
30	作る	1
31	張る	1
32	買う	1

表3-③ 2011年(1月~12月)「~にくい」「~づらい」上接動詞(頻度順)

(~にくい)

順位	「~にくい」上接動詞	頻度
1	する	128
2	分かる	87
3	考える	68
4	見える	56
5	起きる	34
6	される	34
7	得る	24
8	届く	22
9	言う	18
10	なる	17
11	やる	16
12	つく	15
13	出る	14
14	取る	14
15	受ける	14
16	入る	14
17	気付く	13
18	読む	13
19	つながる	13
20	伝わる	10
21	出す	9
22	動かす	9
23	使う	9
24	感じる	8
25	育つ	8
26	見通す	8
27	壊れる	7
28	進む	7
29	持つ	7
30	できる	6
31	得られる	6
32	言い出す	5
33	聞き取る	5
34	住む	5
35	つかれる	5

(~づらい)

順位	「~づらい」上接動詞	頻度
1	する	53
2	分かる	20
3	見える	10
4	取る	8
5	読む	7
6	聞く	6
7	生きる	6
8	使う	5
9	考える	4
10	投げる	4
11	見る	4
12	やる	4
13	言う	3
14	つかむ	3
15	釣る	2
16	決める	2
17	言い出す	2
18	立てる	2
19	歩く	2
20	集まる	2
21	断る	2
22	攻める	2
23	頼る	1
24	居る	1
25	割り込む	1
26	行う	1
27	話し掛ける	1
28	つながる	1
29	かかる	1
30	される	1
31	休む	1
32	離れる	1
33	行く	1
34	残る	1
35	とらえる	1

表4 「～にくい」「～づらい」に上接する  
「分かる」「見える」の述べ数

		1991年	2001年	2011年
分かる	「～にくい」	74	65	87
	「～づらい」	7	12	20
「づらい」の対「にくい」比		9.4%	18.4%	22.9%
見える	「～にくい」	18	28	56
	「～づらい」	1	3	10
「づらい」の対「にくい」比		0.5%	10.7%	17.8%

表5 「無意志動詞+～づらい」の述べ語数と異なり語数（全体比）

	1991年	2001年	2011年
延べ語数	9 (18.7%)	20 (21.9%)	41 (21.6%)
異なり語数	3 (15.0%)	7 (21.8%)	9 (16.0%)

無意志性動詞が20年ほど前から15～20%程度は使用されており、中でも「分かる」「見える」は顕著な増加を見せていることが明らかになった。

しかし、名詞形では、4.2.1で述べたとおり、3回の調査ともに「分かりにくさ」が「分かりづらさ」を上回っており、「分かりづらさ」の出現語数は、1991年と2001年に各1例、2011年0例、「見えづらさ」が3回を通じて0例ときわめて少ないことも付け加えておく。

また、1991年、2001年、2011年すべてに共通するのは、「～にくい」「～づらい」の1位が「する（サ変動詞を含む）」、2位が「分かる」であることである。神作（2004）の調査では、「サ変動詞」は「～づらい」に偏っていたが、金城（2011）や本調査では「する（サ変含む）」は、「～にくい」「～づらい」両方で頻度が一番高いという結果が出ている。

各年の「～づらい」に上接する「する（サ変含む）」の動詞の中で、無意志性のもは1991年が1例、2001年は0例、2011年は2例を確認したのみであった。神作（2004）は、サ変動詞が「～づらい」の形に圧倒的に多く現れ

表6 「する(サ変含む)」の対述べ語数比

	1991年	2001年	2011年
「～にくい」	15.5%	12.7%	12.9%
「～づらい」	27.0%	25.2%	28.0%

る理由として、サ変動詞が意志性を強く持ち、主体の動作であるという側面のためではないかと述べているが、金城(2011:25)で挙げられている「～づらい」に前接する152例のサ変動詞では、43例(約28%)<sup>6)</sup>が無意志性の動詞であることも見過ごせない。これは神作(2004)や本調査では観察されなかった結果である。今後の無意志性のサ変動詞の変化の兆しを示唆するものと言えるかもしれない。表6は、述べ語数に対する「する(サ変含む)」の比率である。「～づらい」の方が比率は高いが、20年間で「～にくい」「～づらい」各々においての比率はあまり変化がない。今後、「無意志性サ変動詞+づらい」の使用率と合わせて、「～づらい」に上接する無意志性動詞がどう変化していくのか見守りたい。

#### 4.2.3 「～づらい」用例の意味分類

4.2.1で述べたように、「～づらい」は「～にくい」に比べてその数こそ少ないものの、20年前に比べ大幅に増加していることは間違いない。また、4.2.2では従来の研究では結合しないとされていた「分かる」「見える」などの無意志性動詞に結合している用例が増加していることが分かった。

では、「～づらい」は、どのような意味用法が拡大しているのだろうか。3.1で分類した「～にくい」「～づらい」の用法(イ)、(ウ)を利用し、「～づらい」のどの用法に変化が見られるのか、分析した。

(イ)

- ①— a. 主体の持つ肉体的条件により困難を感じるもの
- b. 主体の持つ精神的条件により困難を感じるもの

(ウ)

②- a. 対象の持つ条件により困難を感じるもの

b. 周囲の持つ条件により困難を感じるもの

①- a・bは主体の持つ条件、②- a・bは主体と関係なく、周囲や対象の持つ条件によって困難を感じるものとした。

表7のように、①- a・b = 主体に困難の原因があるもの、②- a・bは主体以外(対象や周囲)に困難の原因があるものとして用例を分類すると、いずれの年も②- a・bの主体以外に困難の原因があるものの方が上回っている。また全体に対する割合は、1991年66.6% → 2001年69.3% → 2011年73%と、徐々に増加してきている。先行研究では「～づらい」は主体に困難の原因があることが多いとされているが、本調査の結果では、対象や周囲に困難の原因がある場合に「～づらい」が使用される割合が増加している。

「～にくい」「～づらい」どちらとでも結合可能な場合に、①- a・bだけでなく、②- a・bの条件でも「～づらい」が選択されることが多くなっているということが言えるのではないだろうか。

表7 「～づらい」用例の分類

年 用法	1991年	2001年	2011年
①- a	1 ( 2.0%)	7 ( 7.7%)	8 ( 4.2%)
①- b	15 (31.3%)	21 (23.0%)	43 (22.8%)
②- a	22 (45.8%)	44 (48.4%)	77 (40.7%)
②- b	10 (20.8%)	19 (20.9%)	61 (32.3%)
全体	48 ( 100%)	91 ( 100%)	189 ( 100%)

## 5. 考 察

### 5.1 無意志動詞と結合する「～づらい」

今回の調査では、表5で示したように、従来結合しないとされてきた無意志動詞と結合している例が、述べ語数では1991年18.7%、2001年21.9%、2011年21.6%と20年間を通じて約20%を占めていることがわかった。神作(2004)では、「～づらい」について、述べ語数では10%強、異なり語数では30%弱という結果が出ている。金城(2011)では比率は示していないが、無意志動詞と結びつく例を挙げて考察している。

今回の調査において、「～づらい」と結合する頻度が突出して高かった無意志動詞は、「分かる」と「見える」であった。「わかる」は、神作(2004)においても、他の無意志動詞に比べ高い頻度で現れているが、それについて、神作は、『漢語+サ変動詞』で意志動詞を作る『理解する』の影響が考えられる」とし、『わかれ』『わかるう』とは言えないが『理解しろ』『理解しよう』とは言えるからである」と説明している。筆者の内省においても、「そんなことをしておいて、『分かってくれ』と言われても困る」や「彼のことを分かろうと思っても、なかなか心の中を見せてくれない」などのように、「分かる」を「理解する」という意味で捉えれば、意志性が感じられ、「～づらい」と結びつきやすくなると考えられる。一方で、「分かる」<sup>10)</sup>は、「はっきりみとめられる」「あきらかになる」というような意志性の低い意味も持っており、そのような例も、多く「～づらい」と結合している。

一方、三木(2004)によると、『～づらい』の文で、経験者が存在する場合は、それが困難な状況の源(内在的コントロール)になる」とし、「見える」は、「視界に自然と対象物が入ってくるという意味」で、「非意図的な行為」であり、「意図的な動作主が意識されていない点で他の自発態と共通している」が、「知覚している人—認識者(Sentient)—がはっきりと認識できる点が大きく異なる」としている。従って、「見える」では、認識者=経験者が存在し、それが困難な状況の源となって「～づらい」と共起できると



考えられるし、「分かる」もまた、「見える」と同様に非意図的な行為であるが、困難を感じる経験者の存在が認識できる点で、「～づらい」と共起できるとも考えられる。以下に「分かる」「見える」の例を3例ずつ挙げる。

(下線は筆者)

### 「分かる」

(「理解する」の意味で用いられている例)

- (1) 西欧からの借り物の言葉で語る詩人たちがいる。その私語性が分かりづらい。読者に言葉が届かない現代詩の状況を生んでいるように思える。(2001年)

(「はっきりみとめられる」「あきらかになる」の意味で用いられている例)

- (2) 皿倉山から緑豊かな道を進む。途中、標識が朽ち、道が分かりづらい場所が何か所かあった。(1991年)
- (3) 今後、表面的には分かりづらいものの、ショックを受けている子に気付くためにアンケートをとり、臨床心理士が子どもを集めて心のケアをすることを検討している。(2011年)

### 「見える」

- (4) 今の中学二年の男子は四十年前の高校二年と同じ体格一。文部省が五日まとめた恒例の学校保健統計調査で、現代っ子の大型・早熟化傾向が改めて浮き彫りとなった。その一方で、視力低下、肥満化が進行するなど、大きな体の健康状態が必ずしも万全でない様子をうかがわせている。特に高校生は、受験勉強などで目を酷使してか、黒板の字が見えづらい視力〇・三未満が三〇・〇パーセントにのぼり、ほぼ三人に一人が“メガネ生徒”。(1991年)

- (5) 行橋市の柏木武美市長は十九日、体が不自由な高齢者の気持ちを理解し、同市の福祉施策に反映させようと、市役所内で視野の狭くなる特殊眼鏡を着用して歩くなど、高齢者の身体感覚を疑似体験した。柏木市長は「書類申請では字が見えづらいいうえ、手が思うように動かず困った。役場を訪れた身体の不自由な市民に対する介助システム整備の必要性を痛感した」と語り、理解を深めた様子だった。(2001年)
- (6) 「太陽や地熱、風力などの再生エネルギーを利用し低炭素化を実現するという PR 目標を、どのような手段を使って実現するのか、その具体的な道筋はまだ見えづらい。(2011年)

本調査では、「無意志動詞+づらい」の用例を、「分かる」「見える」のほかに異なりで17例収集しているが、そのうち、三木(2004)の言う内在的コントロールを持つと思われる動詞は、「変色する」「(根が)張る」「残る」が各1例あるのみで、多くは観察されなかった。いずれにしろ、今回の調査では、「無意志動詞+づらい」の用例の全体数が十分ではなく、他の動詞に比べ、「分かる」「見える」に有意な増加が認められることを指摘するに止まった。以下に、「~づらい」が、三木(2004)の言う内在的コントロールを持つと思われる動詞と結合している例を2例と、内在的コントロールを持たないと思われる動詞と結合している例を2例挙げる。

「動詞が内在的コントロールを持つと思われる例」

- (7) ご飯に酢を入れてから炊くと、保温していても変色しづらいし、においもしません。(2001年)

- (8) 「1千万年も前の海底火口とみられる窪地が発見されるのは珍しい。地上では風化して残りづらい溶岩流の跡も海底に3か所、明確に確認された。(2011年)

「動詞が内在的コントロールを持たないと思われる例」

- (9) 5日午前10時半ごろ、東京都内で119番通報がかかりづらい状況になり、約4時間半後の午後3時ごろに復旧した。(2011年)
- (10) 福島第1原発事故が起きるまで東電債の信用力は極めて高いとされ、国債に対する金利の上乗せ幅が0.1%程度と小さくても購入希望者が多かった。だが原発事故後、状況は一変。上乗せ幅が2.5%超となっても売買が成立しづらい状態が続いている。(2011年)

## 5.2 「～にくい」から「～づらい」への移行

4.2.3で見たとおり、本調査での「～づらい」の用例は、困難さの原因が主体にあるものよりも主体以外にあるものの方が多かった。

飛田・浅田(1991)では「まったく同じ文脈で『～づらい』と『～にくい』が用いられる」と「ニュアンスの違いを生ずる」として、次のような例を挙げている。

- a. この靴をはくと歩きづらい。(歩行が困難だ)
- b. この靴をはくと歩きにくい。(靴が窮屈だ)
- c. この小説は読みづらい(文章が自分には難解だ)
- d. この小説は読みにくい(字が小さい)

例えば、同じように「歩く困難さ」を表す場合、困難の原因が主体にあれば「歩きづらい」が選択され、困難の原因が主体以外にあれば「歩きにくい」が選択される。

い」が選択されることが多いのではないかと考えられるが、今回の調査では、主体以外に困難の原因があっても「歩きづらい」が選択されている用例が多かった。主体の困難さの方が強く意識された結果ではないかと考えられる。以下に「歩く」「読む」の例を挙げる。

「歩く」

(主体に困難の原因がある場合)

- (11) 足のサイズは、右と左で微妙に異なっているのをご存じですか。親指が小指側に曲がる外反母趾（ほし）の人や、指にたこができて歩きづらいと感じている人もいます。(2001年)

(主体以外に困難の原因がある場合)

- (12) 福岡市内で最近多くなったれんが風のブロック敷き歩道が、「ハイヒールでは歩きづらい」と女性に不評だ。おしゃれなデザインで「歩道の環境を良くするため」(福岡市道路計画課)に設置され出したが、女性のなかには「ねん挫したこともある」との切羽詰まった声も上がっている。(1991年)
- (13) 「山伏の格好で登山をしませんか」。そんな誘いを受け、霊峰・英彦山に初めて挑んだ。(中略) 添田町と同町観光連盟が今年から観光客向けに企画した日帰り登山ツアー「ひこさん山伏の里探訪」。やっとの思いで奉幣殿に着き、そこからしばらく歩くと急な坂道に差し掛かった。杉の巨木に囲まれた山道は、大小の石がごろごろしていて歩きづらい。(2001年)
- (14) 春の交通安全県民運動の一環として、行橋署(早田康弘署長)は十日、苅田町新津の小波瀬コミュニティセンターで住民の声を交通安全に生かす「交通ヒヤリ地図」を百合ヶ丘老人会(今田猛会

長)のメンバー三十人と作製した。(中略)老人会からは「段差が多く、歩きづらい道もある」など意見が出された。(2001年)

- (15) レンガ敷きの歩道は困るという意見、私も同じです。最初見た時は「おしゃれだな」と思ったけど、とても歩きづらいことに気がきました。自転車で走るとゴトゴトいいます。乳母車だとひどいでしょうね。(福岡市南区、主婦、58)(2001年)
- (16) 久留米署が筑後地区最大の歓楽街・文化街(久留米市)で、しつこく飲食店への呼び込みをする「客引き」の取り締まりを強化している。(中略)同署は「客引きがたむろして歩きづらい」「新幹線開通後、観光都市としてPRしようとしているのに恥ずかしい」との苦情が相次いだことから、一般客を装った私服捜査員を投入するなど取り締まりを強化。(2011年)
- (17) 富岡から大江までの難路を行く「五足の靴」の描写は、連載(十一)蛇と墓(ひきがえる)から始まる。その一節を引用する。  
(中略)出発から約1時間40分で再び西海岸に出た。ここから先は詳細な足取りが分からない。5人が休んだ下津深江(しもつふかえ)(下田北)まで海沿いに行く。波打ち際の「がりがりの石多き径」に下りた。丸みを帯びた小石が海岸を埋めている。足を取られて歩きづらい。(2011年)

#### 「(文字などを)読む」

(主体に困難の原因がある場合)

- (18) 数年前から老眼が進み、細かな文字が読みづらい。(2001年)

(主体以外に困難さの原因がある場合)

- (19) 入社したてのころといえば、十年前になってしまいが、当時はまだ手書きの文書が大半であった。(中略)ものすごい癖字で有名だったSさんが書いた文書に、彼の上司が、この人も読みづらい字を書くので有名であったのだが、何かコメントを書いて差し戻したそう。そのコメントがあまりに乱筆だったので、読み取れなかったSさんは、上司に何と書いてあるのか恐る恐る尋ねてみた。上司の回答はこうだった。「字が汚い。もっときれいに書きなさい」。(2011年)
- (20) お年寄りを介助して病院に行くことがあります。診察の後、処方せんをもらって薬局に同行します。薬について親切に説明してくれますし、最近では、薬をカラーで印刷した説明書もくれるようになりました。分かりやすいので、薬を飲むときに助かるのですが、書いてある文字がとても小さいのです。(中略)「お年寄りには読みづらいので文字を大きくしてください」とお願いするのですが、いまだに改善されません。(福岡市、ホームヘルパー、52歳) (2011年)
- (21) 無実を訴え続けた元死刑囚・西武雄さん=執行当時(60)=の獄中日記を世に出そうと、久留米大学(久留米市)などの学生たちが“デジタル化”の作業を進めている。学生が、手書きで読みづらい約60年前の裁判記録をパソコン入力するデジタル化などを手掛ける。(2011年)
- (22) 私は福岡市早良区出身。福岡市民ならまず読める地名だが、東京での大学時代「“はやよ”って読むの?」と聞かれ「地元しか通用しないのか」と驚いた▼熊本市が政令市になった時にできる5

区の名前を、市の審議会が答申した。中央部の区名は「中央区」。だが議論の中では「銀杏（ぎんなん）」を推す意見が出た。理由は「熊本城は“銀杏城”として親しまれているから」。ただ銀杏は「いちよう」とも読み、県外の人には読みづらい。(2011年)

- (23) 西日本新聞は元日付の各地域版で、変化の予感にあふれたさまざまな動きや課題を取材、特集しました。「九州人」の夢や思いが詰まった9つの紙面を紹介します。(中略)

【おことわり】この特集は、地域版の魅力をひとまとめに紹介するため各紙面を縦横ともに約2分の1に縮小し、特別に編集したものです。文字が読みづらい点はご了承ください。(2001年)

その他にも、主体以外に困難の原因がありながら「～づらい」が選択されている例がある。以下5例を挙げる。

- (24) 大牟田市営の延命プールが老朽化に伴う調査のため、今年は営業中止になるという。(中略)延命プールに代わり注目されつつあるのが、大牟田市の甘木山の山頂近くにある県営プール。(中略)山の上はいささか交通の便が悪く、車を使わないと行きづらいが、ちょっと足をのばしてみるだけの価値はある。私にとっては、大牟田の自然や風景の素晴らしさを再認識できた場所だった(重)(2001年)

- (25) 天体観測は明るい市街地ではしづらいですが、肉眼で見るコツは、まず街灯の近くは避けること。家の電気を消して、最低二十、三十分間は目に光を当てないようにし、暗やみにならずと見えてきます。(2001年)

- (26) 春の九州大会では鹿児島実業、沖縄水産など、甲子園でも名の知れた実力校に勝ち、準優勝となっただけに、今年の柳ヶ浦への期待は大きい。(中略) 控えの井手は、大分大会の中津南戦ではメンバー全員で先発に決められ、1安打に抑えて完封。打ちづらいくせ球を投げ、球威は岡本克と変わらないが、制球に欠ける。  
(1991年)

- (27) 新博多駅ビルについては、バリアフリー化の達成率は91%。各階のトイレは広く作られていたが「洗浄ボタンが奥まった場所にあって簡単に押せなかった」「手すりのすぐ下にトイレトーパーが備えてあるので使いづらい」という意見が出た。

- (28) 「早く、家の中に入りなさいっ！」  
1986年、ポーランドの首都ワルシャワ郊外。11歳のラデック・ティシュキェヴィッチ君は公園で遊んでいると突然、母親から大声で呼び戻された。家に戻ると、外で遊ぶことを禁じられた。切羽詰まった様子の母親にラデック少年はうなずくしかない。見たこともない薬も飲まされた。えぐくて飲みづらい。隣の国の原子力発電所で爆発事故が起きたせいだと、母親は言う。後日、友だちも皆、外遊びを禁じられ、同じ薬を飲まされていたと知った。  
(2011年)

このような例は、名詞形「～にくさ」「～づらさ」でも、特に「生きる」において、特徴的に現れている。「生きにくさ」は1991年0例→2001年6例→2011年2例と変化しているが、「生きづらさ」の方は、1991年0例→2001年1例→2011年17例と、2011年には「～にくさ」が減少したのに反して「～づらさ」が急増している。17例の内訳は、主体に困難の原因があるものが5例で、他は社会の様々な問題が原因で生きることに困難さを覚えると



いう用例である。また、「～にくさ」と「～づらさ」が併用されているものも1例見られた。「生きる」という語彙<sup>⑧</sup>が、「命を保っている」という意味よりも、「暮らしていく」という意味で使用されている用例が多く、困難の原因は社会や周囲の環境などにある場合が多く見られるが、「生きる」主体である人間の「困難な気持ち」の方に焦点が当てられて「～づらい」が選好されているようである。

### 「生きる」

(主体に困難の原因があるもの)

- (29) 先日、広汎性発達障害の当事者や家族をサポートする福岡市のNPO法人を取材した。そこで当事者の「生きづらさ」をあらためて思い知らされた。対人関係をうまく築けない、コミュニケーションが苦手、興味や関心に偏りがあるなど、様々な特性がある。(2011年)

(主体以外に困難のあるもの)

- (30) 1979年に国連総会で「女子差別撤廃条約」が採択され、日本は85年に批准した。(中略) 固定的な社会的性差別からの解放を求めるジェンダーフリーの動きも高まったが、反発するバックラッシュ(揺り戻し)の動きもあった。現在は非正規雇用の増加や収入の低下、既婚率の低さなど、特に男性の生きづらさも指摘され、男性を焦点にしたジェンダーの再考も行われている。(2011年)

(「～にくさ」と「～づらさ」が併用されているもの)

- (31) みんなで創る！子どもが育つ地域づくり in 福岡 (中略) 楠凡之・北九州市立大学教授が「子どもの生きにくさ・生きづらさ—コミュニティは何ができるのか」と題して基調講演した後、「虐待防止」「学童保育」「就労と育児の両立支援」をテーマに3分科会を開く。(2011年)

以上の例を見ると、困難の原因は対象や周囲にあっても、それを客観的な困難として表すよりは、主体の困難として自らに引き寄せて、自らの困難な気持ちを強く打ち出すために「～づらい」が選択されているように考えられる。道の状態が悪いことよりも、その道を歩くのが困難な自分の気持ちが、文字に問題があることよりも、その文字を読むことが困難な自分の気持ちが、また、社会や環境に問題があっても、そのような社会に生きる人間の困難な気持ちがそれぞれに強調されているようである。

## 6. まとめ

本稿では、「～にくい」「～づらい」用法の使い分けが、20年の間にどのように変化してきたのか、その推移と変化の内容、程度に重点を置き、調査、分析して考察を加えた。その結果、次のようなことが明らかになった。

1. 1991年、2001年、2011年の20年間3回の調査では、「～にくい」と「～づらい」の出現数は、「～にくい」が「～づらい」を大きく上回っている。また、「～にくい」「～づらい」それぞれに出現数は増加しているが、「～にくい」の方が緩やかな変化なのに対して、「～づらい」の方は急激な増加を見せている。
2. 従来、結合しないとされていた無意志動詞と結合している例が、各年において、述ベ語数で約20%見られた。中でも、「分かる」と「見える」は、数において「～にくい」には大きく及ばないものの、顕著な増加を示している。
3. 飛田・浅田（1991）では、「～にくい」は、困難の原因が主体でなく対象にあることが多く、「～づらい」は、困難を感じている主体を暗示する」とあるが、今回の調査では、困難の原因が明らかに主体以外にあっても、「～づらい」が選択されている例が多く見られた。

今回の調査では、1991年から2011年までの「～にくい」「～づらい」の変化の様相を垣間見ることができた。しかし、10年ごと3回の調査であり、一

地方の新聞記事という「書き言葉」の一部分における「～にくい」「～づらい」の姿が見えただけである。今後は、さらに幅広く詳細な研究が必要と思われる。

### 註

- (1) 神作晋一（2006）「形容詞型接尾語『にくい』『づらい』の動向—スポーツ紙のウェブページから—」、金城克哉（2011）「コーパスの研究に基づく『にくい』『づらい』表現の研究」
- (2) 西日本新聞は、九州地方を中心とするブロック紙で、発行部数81.4万部。西日本新聞オンライン記事データ「パピルス」は、九州全域の地域版の朝刊、夕刊の記事を含む。
- (3) 金城（2011：22）では、神作（2006）のスポーツ新聞ウェブサイトの調査では内容がスポーツに特化されているため、自身の研究では多様なトピックや「編集者の校閲を経ない」データを対象とした調査を試みたと述べている。
- (4) 西日本新聞社によると、日によって紙面数に多少の変化はあるものの、過去20年間に大幅な紙面数の増減はないということである。
- (5) 無意志動詞の定義については、宮島（1972）の分類：(A)有情物の意志的動作 (B)非有情物の無意志動作 (C)非有情物の動きを参照した。また、仁田（1988）は動詞を、意志や命令、禁止のモダリティをとりうるかどうかという観点から考察している。
- (6) 金城（2011：25）表3のうち無意志性と思われる動詞：妊娠する／燃焼する／浸透する／繁殖する／発生する／放熱する／リバウンドする／イライラする／ケガする／のびのびする／パンクする／影響する／化粧崩れする／化粧する／火傷する／乾燥する／完治する／機能する／合格する／酸化する／自然治癒する／失敗する／上昇する／蒸発する／退色する／着床する／内出血する／熱ダレする／排卵する／爆発する／肌呼吸する／発芽する／発展する／反応する／付着する／普及する／腐敗する／変化する／変色する／摩耗する／乱反射する／流産する／劣化する（43例）。その他に、解決する／誤動作する／消化する／のように、動作主や意味の違いによっては意志的にも無意志的にもなりうる動詞もあった。
- (7) 『例解新国語辞典』によると、「分かる」の意味として「①意味を知る②はっきりみとめられる。あきらかになる。③世の中のことや人情に理解がある。」とある。
- (8) 『例解新国語辞典』によると、「生きる」の意味として「①命をたもっている②暮らしていく③効果やはたらきがじゅうぶんにひき出される。④野球や碁（ご）などで、塁（るい）に出た選手や、打った石がだめにならずにすむ。」とある。

### 参考文献

- 神作晋一 (2006) 「形容詞型接尾語『～にくい』『～づらい』の動向—スポーツ紙のウェブサイトから—」『国語研究』6: 18-35
- 金城克哉 (2011) 「コーパス分析に基づく『～にくい』・『～づらい』表現の研究」 琉球大学留学生センター紀要 8: 19-35
- 高島俊男 (2007) 「『～にくい』から『～づらい』へ」 『文芸春秋』85(1): 86-88
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版
- 仁田義雄 (1988) 「意志動詞と無意志動詞」『月刊言語』第17巻5号
- 飛田良文・浅田秀子 (1991) 『現代形容詞用法辞典』東京堂出版
- 藤家智子 (1998) 「難易文に関する一考察—『～やすい/～にくい』の意味・用法をめぐって」『日本語・日本文化研究』: 28-42
- 三木望 (2004) 「『～づらい』について—自発と否定、可能の連続性—」景山太郎・岸本秀樹編『日本語の分析と言語類型：柴谷方良教授還暦記念論文集』くろしお出版
- 宮島達夫 (1972) 『動詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版
- 森田良行 (1977) 『基礎日本語辞典』角川書店

### 辞書

『例解新国語辞典』第6版 (2003) 三省堂